

虫の音が聞こえてきそう

うたがわくによし おうみのくに はぎのたまがわ しょこくむたまがわ
歌川国芳「近江国 萩の玉川 〈諸国六玉川〉」(草津市蔵)



宵闇の中、川べりに萩が咲いています。右端の女性は行灯を手にして華やかな振袖を揺らし、今まさにこの画面の中に登場したところでしょうか。夢中で萩を愛でていた左の2人のもとに、明かりを持ってきたのかもしれませんが。萩は秋の七草のひとつ。初秋の夜の、涼しげな情景です。

題の「萩の玉川」は、近江国の歌枕「野路の玉川」を指します。歌枕とは古来、和歌に多く詠まれた名所のことです。中でも全国6か所の「玉川」はまとめて「六玉川」と呼ばれ、数々の文芸作品や芸能、絵画作品の題材になってきました。嘉永年間(1848~1854)のこの作品も6点が組になった「諸国六玉川」のうちの1点です。

野路の玉川を詠んだ和歌の代表的なものに、平安時代後期の歌人・源俊頼の古歌「明日も来ん 野路の玉川萩こえて 色なる波に月宿りけ

り(明日も来よう、野路の玉川には萩の花が映り、さらに月までも映りこんでいる)」があります。このように、野路の玉川はしばしば夜の情景として描かれました。そのイメージの通り、ここでも上部の黒のぼかして夜の闇が表され、萩はシルエットと小さな白い花で表現されています。定番のモチーフを描きつつ、彩り豊かな衣装をまとう女性たちを主役として浮き上がらせた、美しい作品です。

絵師の歌川国芳(1797~1861)は幕末期を代表する浮世絵師で、武者絵や風刺画をはじめさまざまな作品を残しており、近年は猫を好んで描いた絵師としても人気があります。この「諸国六玉川」全6点はいずれも大判(縦約36センチ、横約26センチ)3枚続きの迫力ある画面に女性たちを配し、それぞれ1枚ずつの作品としても成立するよう計算された巧みな構図になっています。

(令和4年10月・草津宿街道交流館 富田 由布子)